

ラオス・ビエンチャンの発展と オーガニックマーケット



写真1 ラオスの国花インドソケイ



山の国ラオスとオー ガニックマーケット

ラオス人民民主共和国は南北に長く、どこかしらこの国の国花であるインドソケイ(学名 *plumeria*・写真1)に似た形をした国です。東方のベトナムとは山峰を境に、西方のタイとはメコン川を境に接して、中国、ベトナム、カ

ンボジア、タイ、ミャンマーの5カ国に囲まれています。国土は約23・7万平方キロメートルと日本の本州に相当し、人口は660万人^{※1}と千葉県程度の人口しかなく、自然が多く残り、人口密度が少なくてゆったりとした気持ちになる国です。

ラオスの言語はラーオ語と呼ばれ、メコン川流域で発達した文化の影響を受け、タイ語と類似し、方言程度の違いしかないと言われていいます。ただし隣国タイが平地主体の国であるのに対し、ラオスは山間地域が大きな割合を占めるため、地形の影響を受けてタイ国とは大きく異なる文化が発展してきました。

ラオスはミャンマー、カンボジアに並ぶGDP(国内総生産)^{※2}が低い、貧困国の一つと数えられています。しかし近年、首都ビエンチャンにおいて都市開発が急速に進んでおり、多くの海外文化の流入に伴い、国内外に向けた有機農業への関心が高まり、ビエンチャン市内にあるオーガ



写真2 スイスのNGO ヘルベタスのロゴマークとマーケット(2009年)

※1 2013年・ラオス統計局 ※2 2011年・The World Bank



写真4 当センターのパートナーである
ビエンチャン農業林業局の本部



写真5 ラオスのシンボルとして
有名なタートルアン



写真3 小規模だったころの販売の様子 (2009年)

ニックマーケットは規模や人も著しく増えています。

広がり続ける オーガニックの輪

ビエンチャンにオープンしたマーケットは、2004年にビエンチャン農業林業局(以下、DAF)とスイスのNGO「ヘルベタス」が16軒の農家メンバーを選んで始めた、官民の共同プロジェクトです(写真2・4)。このオープンに先駆けて2000年、当自然農法センターとDAFが自然農法の普及について協力関係を結ぶ合意を締結しました。そのため、DAFが推奨するオーガニック栽培の方法として選ばれたのが、当センターが普及する自然農法とEM技術であり、オーガニックマーケットへ出荷する農家に向けて指導され、普及拡大し続けています。毎週土曜日に、ラオスのシンボルであるタートルアン(写真5)の近くの広場で週末マーケットとして始まりましたが、2009年から日数を増やし始め、今では空港近

くのChao Fa Ngum公園を含み週4日オープンしています(表1)。その規模は、昨年2014年の時点で、登録されているオーガニックグループ農家数は854軒で1000haを超えた面積で栽培されており、10年で50倍以上に増加したことが報告されています(表2)。

今では、すっかり有名になったビエンチャンのオーガニックマーケットは、ラオス国内だけでなく、メディアを通じて多くの国々で紹介されるようになりました。マーケットにはラオス人だけでなく、海外の人たちも訪れるようになっていきます。当初は、レタスを始めとする葉野菜に偏って販売されていました。今ではバラエティーに富む葉菜類はもちろん、他にも丸ナス、ゴーヤにトマト等の果菜類、熱帯果樹類、根菜類に米やキノコ類までもが取り扱われ販売されています(次ページ写真6・7)。またオーガニック認定の商品ではない、ラオスの加工食品の販売も一部で行なわれています。

今では、すっかり有名になったビエンチャンのオーガニックマーケットは、ラオス国内だけでなく、メディアを通じて多くの国々で紹介されるようになりました。マーケットにはラオス人だけでなく、海外の人たちも訪れるようになっていきます。当初は、レタスを始めとする葉野菜に偏って販売されていました。今ではバラエティーに富む葉菜類はもちろん、他にも丸ナス、ゴーヤにトマト等の果菜類、熱帯果樹類、根菜類に米やキノコ類までもが取り扱われ販売されています(次ページ写真6・7)。またオーガニック認定の商品ではない、ラオスの加工食品の販売も一部で行なわれています。

表2 ラオスオーガニックグループの農家数と面積

	農家数	面積 (ha)	年間生産量 (t)
畑作	316	176	データなし
稲作	538	870	3,875

2014年 DAF 農業部

表1 オーガニックマーケットの曜日と時間帯と場所

	月曜日 午後	水曜日 午前	木曜日 午後	土曜日 午前
タートルアン 近辺	—	2009年 オープン	—	2004年 オープン
空港近辺	2013年 オープン	—	2014年 オープン	—



写真6 オーガニックの農作物の種類・取扱量が増え、賑わうマーケットの様子



写真7 米はオーガニック認証のマークが貼られる。手前には黒米も並べられている。

オーガニックブランドで農家の収入も改善

オーガニック農家グループには、畑作の農家グループと稲作の農家グループとがあります。そのうち稲作の農家グループの多くは化学肥料が買えないため、無肥料で粗放栽培に近い農家が存在しました。DAFの農業部では

2012年はナサイトン地区2軒とサイタニ地区3軒の農家を選び、EM活性液やボカシを用いてインディカ米品種のTDK11の有機栽培試験を行いました(写真8・9)。その結果、一般の慣行栽培の化学肥料代と比べ約35%の資材コストを抑える事ができ、さらに籾収量平均5.2t/haと、その年の同じ乾季作の一

般平均収量4.86t/haを上回り、EM活性液やボカシへの期待が高まっています。オーガニック農家グループの形成は、栽培技術の向上以外に販売面においても有利な状況を生み出しました。地域の農家がオーガニック農家グループとしてまとまることで、販売業者との価格交渉ができるようになり、出荷額の向上がはかられました。さらに5年ほど前に、DAFの担当部署である農業部は精米機を入手し、業者を介さず加工し直接販売すること、オーガニックグループの独自のブランドを確立しました。これ



写真8 EMを用いた自然農法栽培試験の看板と稲



写真9 左が自然農法栽培で、右の慣行栽培よりも葉が黄化していない

により、適正な単価に設定した個包装のオーガニック米を市場に出すことができ、一般よりも2割高程度でマーケットに持ち込んだ作物は、ほとんど売ることができるようになっているそうです。その結果、農家の生産意欲も高まり、生産販売量が増え収入も大きく改善されました。

国を豊かにするオーガニックの輪

同国のオーガニックグループの輪は、有機物資源を地域循環させながら次第に拡大し、消費者の健康に寄与する農産物を生産することで、農

家が豊かになり消費者の健康も増しながら、社会発展に繋がっています。生産と消費のお互いが高め合う、善循環の輪ができていきます。

こうした活動がさらに発展していくよう、DAFの農業部と共に協力し、自然農法の普及と技術定着のために、情報を発信していきたいと思えます。ラオス国の農家が自然の働きを理解し、自然の力を引き出しながら、より安全で安心な作物生産を安定して続けられるよう、多くの生産者の輪がますます広がって行くように努めていきたいと思えます。(国際課佐野雄次郎)